SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語科授業案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-08-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 聡美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026739

国語科授業案

授業者　木下　聡美

１　日　時　　平成 30 年 10 月 12 日（金）　第 2 時　11：20～12：10
２　学　級　　２年Ｃ組　（２年Ｃ組教室）
３　題材名　　「勇者メロス」を語ろう

４　題材の目標

「走れメロス」は友のために走る美談だと感じている子どもたちが，メロスが勇者になったのはいつかということを登場人物たちとのかかわりや気持ちの変化から考え，語り合うことを通して，メロスの人間らしさに気づき，「勇者」とは何かということについて描写に基づいて考えを深めることができる。

５　題材観

(1)　「走れメロス」の魅力

「走れメロス」を読み終えたとき，王との約束を果たし，セリヌンティウスのもとに戻ったメロスに賛辞を送りたくなります。そして，最後の一文で「勇者は，ひどく赤面した」と描かれるメロスの姿は，冒頭の「メロスは激怒した」という一文と対比され，怒りにまかせて王城に乗り込んだメロスが勇者として成長を遂げたことを印象づけます。多くの困難を乗り越え，暴君ディオニスの心を動かした「勇者メロス」の姿は私たちの心に多くのことを訴えかけているでしょう。

「走れメロス」は，没後 70 年を迎えた今も，多くの人から愛され続けている太宰治の作品です。大人になってから中学時代に読んだ印象を問われると，作品の細かな描写は忘れていても，「メロスが多くの人を殺した王に対して怒りをもち，自分の代わりに人質となった友だちを助けるために命懸けで走る話」として覚えている人も多いのではないでしょうか。

改めて読み返してみると，邪知暴虐の王に怒りを感じたメロスが王城に乗り込むところから始まるこの物語を読む人の中には，正義感の強さから，無二の親友であるセリヌンティウスを一方的に人質として差し出す場面に，なんて自分勝手な人物なのかといらだちを感じる人もいるでしょう。一度は濁流の前で力尽きながらも，やはりセリヌンティウスを死なせるわけにはいかないと再び立ち上がる場面では，読み手も心を奮い立たせ，黒い風のように走るメロスの揺るぎない精神を感じることもあるでしょう。最終的に暴君ディオニスの心までも動かしてしまうことで，ハッピーエンドを迎えるこの物語は，メロスと共に走り抜けるような臨場感のある描写や繊細な心情表現が魅力的な作品です。

そのような作品を通して描かれるメロスは人間の理想的な部分を見せてくれます。友との約束を果たすこと，自分の決意を貫くこと，正直な生き方をすることなど，人としての美しさをもつ勇者の姿として描かれています。

しかし，この作品は原作であるシラーの「人質譚詩（たんし）」には描かれていない，苦悩するメロスの様子が数多く描写されているため，「友を助けるために命懸けで走った」という美しい友情を伝えるだけの物語ではないと言えます。人間の弱さを描いているにもかかわらず，太宰治が最後の場面でメロスを勇者として描いているのはなぜでしょうか。この作品を「勇者」という視点で考えたいと思います。

(2)　なぜ「勇者」について考えるのか

メロスは一体いつ「勇者」になったのでしょうか。この問いをもって読んだとき，一牧人であり，「単純な男」であったメロスがどのような思いで困難に立ち向かっていったのか，その思いの変化がどのように描かれているのかということを読み取っていくことができます。また，王との約束を守り，セリヌンティウスを死なせてはなるまいという強い意志をもって必死に走り抜く「勇者」らしい姿だけでなく，家族への思いから生きることへの未練を感じる姿や，疲労して弱った心に巣くう逃げ出したくなる心情などから，メロスの心の葛藤が見えてきます。そのメロスの姿を読み取っていくためには，暴君として描かれているディオニスの心情の変化が何によってもたらされたのかということや，無二の親友であるセリヌンティウスの存在がメロスや王にどのように影響を与えたのかということについて読み取っていくことが必要不可欠になるのではないかと考えます。

このように登場人物のかかわりから「勇者」にいつなったのかということを読み取っていくことで，私たちが普段抱いている「勇者」に対する「強い意志をもち，困難を乗り越える人」というイメ

ージだけでなく,「弱さをもった一人の人間」としての姿についても考えを広げていくことにつながるはずです。

(3) メロスはいつ「勇者」になったのか

①「勇者」という言葉が出てくる場面から考える

> 勇者１「ああ，あ，濁流を泳ぎ切り，山賊を三人も打ち倒し，韋駄天（いだてん），ここまで突破してきたメロスよ，真の勇者，メロスよ」

この「勇者」とは，それまでの濁流や山賊といった困難を前にしても決してあきらめない強い者としてのメロスの姿を指しています。しかし,「勇者」が何ものにも屈しない強い者であるならば，その後の弱音を吐くような独白を描く必要はありません。つまり，この「真の勇者，メロスよ」という言葉は自分を奮い立たせるための言葉であり,「真の勇者」と自分自身に向けて言うことで，強く勇ましいメロスの姿を読者に印象づける場面にしているのです。

> 勇者２「やはり，おまえは真の勇者だ」

独白の後,泉からわき出る水を一口飲むことで,再び「義務遂行の希望」が生まれ,「我が身を殺して,名誉を守る希望」が生まれたと語っています。ここで初めて「名誉」という言葉が出てくるのです。それまでは王との約束を守り，セリヌンティウスを助けることが「正義」であったはずが，メロスの心は自分の名誉を守ることによって「正義の士」として死ぬことを求める気持ちが大きくなります。「正直な男のままにして死なせてください」という言葉も，自分に向けた名誉を守る言葉であると考えられます。

一方で「ああ，その男のために私は，今こんなに走っているのだ」とも述べています。自分のためだけでなく,友との「信実」を守ることもまた,メロスにとって重要であることがわかります。この場面の「勇者」という言葉は自分自身と，セリヌンティウスのためという二つの思いが重なって生まれた言葉であると言えるでしょう。

> 勇者３「勇者は，ひどく赤面した」

娘に緋のマントを渡されて初めて，メロスは自分が真っ裸であったことに気づきます。この「勇者」はそれまでの２回と違い，語り手がメロスのことを「勇者」として評価している場面です。つまり,この段階でメロスは他者から見ても「勇者」であると認定されたということです。では何がメロスを「勇者」にしたのでしょうか。

ここで大事なことは,語り手から見た勇者が「ひどく赤面した」と述べていることです。真っ裸であることを認識し，恥ずかしいと感じたメロスの人間らしさが表れています。つまり,「勇者」であっても一人の人間なのだということを読み取ることができます。直前のディオニスも「顔を赤らめて」「おまえらの仲間に入れてほしい」と言っています。出会いの場面では「その王の顔は蒼白で，眉間のしわは刻み込まれたように深かった」と描写されていることと比較しても，血の気のない表情に赤みが差すことで，王の心に人間らしさがよみがえったことがわかります。つまり,「赤面する」という言葉を通して「勇者」の中にある人間らしさを表現している場面です。

②メロスと語り手の視点から考える

「正義」を貫くこと,「信実」を王の前で示したことは，信念を貫くという人間の美しい部分であり，人としてそうありたいと願うという部分において，メロスが「勇者」として評価される部分でしょう。しかし,メロスの姿を読み取っていくと，そのような美しい部分だけではない描写が数多く描かれていることに気づきます。それは,「勇者」の中にある人間らしさが重要であるということの裏付けになりそうです。

そこで太宰治が書き足したメロスの心の葛藤や弱さを見せる部分を「語り手の視点」と「メロスの視点」で考えました。すると以下のように分けられます。

＜村から出発するまでの場面＞

【語り手の視点】

- メロスも満面に喜色をたたえ，しばらくは，王とのあの約束さえ忘れていた
- 一生このままここにいたい，と思った
- よい人たちと生涯暮らしていきたいと願った
- 少しでも長くこの家にぐずぐずととどまっていたかった
- メロスほどの男にも，やはり未練の情というものはある
- 若いメロスは，つらかった。幾度か，立ち止まりそうになった。えい，えいと大声上げて，自分を叱りながら走った

【メロスの視点】

- ちょっと一眠りして，それからすぐに出発しよう
- 約束の刻限までには十分間に合う
- あの王に，人の信実の存するところを見せてやろう

・笑ってはりつけ台に上ってやる
・私は，今宵，殺される。殺されるために走るのだ。身代わりの友を救うために走るのだ。王の奸佞邪知を打ち破るために走るのだ

「語り手の視点」で描かれているメロスの姿を分析すると，妹の結婚式に参加しているときに王との約束さえ忘れていることや，少しでも長くこの家にとどまっていたいと思うことからも，メロスが一人の兄として幸せな生活を送りたいと願っていることがわかります。そこに「未練の情」があるからこそ，村から走り出すメロスはその思いを振り切るように「雨中，矢のごとく走り出た」と描写されているのです。これは王城から村へ戻るときには「正義」を貫く使命感に駆られ，何のためらいもない心を「初夏，満天の星である」と表現していることと対比されています。

一方で「メロスの視点」で描かれている部分は，使命感をもち，「殺されるために走る」と強い意志をのぞかせています。語り手の視点と比較して読むと，メロスは自分自身に言い聞かせるようにこの言葉を言っているのではないかとも考えられます。だからこそ語り手はメロスの真意を語り，立ち止まりそうになりながらも，自分を叱って走るメロスの迷う心を表しているとも言えるでしょう。

＜疲れ切って動けなくなる場面＞
【語り手の視点】
・幾度となくめまいを感じ，これではならぬと気を取り直し
・天を仰いで，悔し泣きに泣き出した
・もう，どうでもいいという，勇者に不似合いなふてくされた根性が，心の隅に巣くった

【メロスの視点】
・ああ，もう，どうでもいい。これが私の定まった運命なのかもしれない
・ああ，このうえ，私に望みたもうな。放っておいてくれ。どうでもいいのだ。私は負けたのだ
・私は，永遠に裏切り者だ。地上で最も不名誉の人種だ
・ああ，もういっそ，悪徳者として生き延びてやろうか
・正義だの，信実だの，愛だの，考えて見ればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ，何もかもばかばかしい。私は醜い裏切り者だ。どうとも勝手にするがよい。やんぬるかな

この場面は，長いメロスの独白として描かれていますが，メロスの心に巣くった人としての弱い部分が表現されています。「正義」を貫くことを放棄し，「信実」を示すことに対して「どうでもいい」「人を殺して自分が生きる」という自分を正当化する言葉を独白します。それによって，どんなときも揺るぎない精神でやり遂げる強い人間ではなく，あきらめることも弱いところもある一人の人間であるということが印象づけられるのです。

このことは，後の王城にたどり着くまでに必死になって走るメロスと対照的であり，そのような姿を描くことで弱さを克服した勇者としての印象を強める効果があるでしょう。

一方で「語り手の視点」では，何とか立ち上がろうとする姿や，それでも動けない悔しさを客観的に描いています。そして「勇者に不似合いなふてくされた根性」という表現は，自分を「真の勇者」と言っているメロスに対する戒めや励ましの言葉にも見えます。

このように語り手とメロスの視点が入り交じる構造によって，「やんぬるかな」と全てを放棄するメロスの心の葛藤がより鮮明に見えてきます。

③ 二人が殴り合う場面から考える

結末部を読むと，「単純な男」であったメロスが約束を守り，王城に戻った場面においても，群衆から「勇者」として称えられることがなかったことがわかります。つまり，たどり着くことが「勇者」のゴールではなかったということです。

では，メロスとセリヌンティウスが互いに殴り合う場面は，何を表すのでしょうか。

メロスは心に「悪い夢」が巣くったことをセリヌンティウスに伝え，力いっぱい殴ってもらうことでその悪夢を見た自分の全てを受け入れてほしいと願い出ます。また，セリヌンティウスも同じように，「たった一度だけちらと君を疑った。生まれて初めて君を疑った」とメロスに伝えます。人質になることさえ黙ってうなずいたセリヌンティウスが語る，「ちらと君を疑った」という言葉は，それまでメロスが「信じられているから走るのだ」と何度も述べていたことと対比され，やはりセリヌンティウスも一人の人間であり，疑うことも不安になることもあるのだということを印象づけます。そしてセリヌンティウスもまた，弱さをもった自分の全てを受け入れてほしいと伝えるのです。

この二人のやりとりは，一度も心が折れることなく走りきる力強い勇者よりも，よほど生々しい人間の姿だと考えます。偽ることなく，自分の全てをさらけ出し，互いの弱い部分さえ受け入れて信じ合う二人の姿がディオニスの心を変えたのです。「『信実』とは，決して空虚な妄想ではなかった」というディオニスの言葉は，彼が今まで人を信じたいと思いながらもできなかったのだという

ことを表しています。互いに信じ合うという「信実」の姿をメロスとセリヌンティウスのやりとりから感じたディオニスが，それまでの自分を振り返り,自分の弱さを受け止めた場面でもあります。

つまり，メロスは自分が真っ裸になっていることさえ気づかないほど，命をかけて走り抜いただけでなく，一度走ることをあきらめかけたという自分の弱ささえもセリヌンティウスにさらけ出したことで，暴君を改心させた本当の意味での「勇者」になれたと言えるでしょう。

(4) 「勇者」とは何か

これらのことから,「走れメロス」で描かれた「勇者」とは，困難を前に立ち止まり，苦悩するといった心の弱さをもった人間らしい姿も含めて「勇者」であると言えるでしょう。

なぜなら，自分の弱さを素直に認めることはたやすいことではないからです。仲間を裏切りそうになった自分の弱さを他者にさらけ出すことは，自分のそれまでの努力さえ無にしかねないことであり，簡単にできることではありません。それができたメロスの姿は「勇者」だと言えるでしょう。さらに自分の弱さをさらけ出した上で，他者にも弱い部分があることを知り，その弱さを受け入れることや,それによって人々の心をも動かす姿は,まさに「勇者」の姿としてふさわしいのではないでしょうか。

(5) 本題材における国語科ならではの文化

「巧みな文章構成や登場人物の繊細な心情描写から,『勇者』とは何かということを読み取り，叙述に基づいた根拠をもって考えを伝え合うことで読み取りを深めていくこと」を本題材における国語科ならではの文化とします。「勇者」という視点で読み進めていくなかで，今まで自分が考えていた勇者像とは違った姿に出会うでしょう。そこに疑問をもち，再び文章を読み込んだときに見える「勇者像」は子どもたちの見方を広げていくはずです。こだわりをもって自分の考えを伝え合うことの楽しさを味わいながら,「勇者メロス」の姿を見いだしていく姿を期待しています。

(6) 題材と子どもたち

「メロスはいつ「勇者」になったのか」という問いを追求する中で，子どもたちは「何をもって『勇者』と定義づけるのか」ということについて思いを巡らせ，自分の考えの根拠となる叙述を探していくでしょう。叙述に基づいて自分の考えを創りあげてきた子どもたちは，自分の意見にこだわりをもつことができます。その際，今までの勇者像に沿わない描写も多いため，仲間がどのように考えるのか意見を交わしたくなるでしょう。

そのような子どもたちが自分とは異なる意見に出会ったとき，相手の意見の根拠はどこにあるのか，自分の考えと違いが生まれたのはなぜかということについて知りたいという気持ちをもつはずです。このような思いをもって考えを交流させることで，仲間の多様な考えを聞き，その考えを受け入れたり，自分の読み取りを振り返ったりしながら，子どもたちはさらに深い「読み」を創りあげていくでしょう。

さらに，仲間と語り合うことを通して「気づかなかったことに気づくことができた」,「読み取りが深まった」という実感をもった子どもたちは，他の作品に出会ったときも，自分の思いを伝えていきたいという気持ちをもつでしょう。そのような経験を積み重ねていくことで，どのような言葉で伝えれば自分の思いが理解されるのか，仲間はどのような考えを伝えようとしているのかということについて思いを巡らせることができるようになるのではないでしょうか。考えや思いを伝え合うことを通して，子どもたちが言葉を吟味しながら発信したり，相手の思いを受け止めたりすることの楽しさを味わいながら，生き生きと語り合っていくことを願っています。

参考文献：安原杏佳音(2013)「太宰治『走れメロス』:論―反美談としての読解の試み―」
『近代文学試論』51 号　広島大学近代文学研究会
石橋邦俊(2013)「シラーの“Die Bürgschaft Ballade”と小栗孝則訳『人質　譚詩』」
『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要. 人間科学篇』27
九州工業大学大学院情報工学研究院
佐々木義登(2008)「勇者の条件―太宰治『走れメロス』論―」
『二松 ： 大学院紀要』22　二松學舍大学大学院文学研究科
田中実,　須貝千里編(2012)『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑰(ひやく)―』
教育出版株式会社
千田實(1987)「太宰治『走れメロス』における一考察―近代文学に現れた古典の世界―」
『武蔵野短期大学研究紀要』3　武蔵野短期大学

６　新学習指導要領との関連

Ｃ　読むこと

イ　目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり，登場人物の言動の意味などについて考えたりして，内容を解釈すること。

Ａ　話すこと・聞くこと

エ　論理の展開などに注意して聞き，話し手の考えと比較しながら，自分の考えをまとめること。

７　題材構想（全８時間）

(1)　「走れメロス」と出会い，感想を交流しよう（２時間）
(2)　メロスが勇者になったのはいつだろう（３時間）
(3)　「勇者」になったメロスの姿を伝え合おう（２時間：本時はその２）
(4)　「勇者メロス」について考える（１時間）

(1)　「走れメロス」と出会い，感想を交流しよう（２時間）

授業者は「走れメロス」を知っているか問いかけるところから授業を始めます。子どもたちの中には，既に読んだことがある子どももいますし，何となくストーリーを知っている子どももいるでしょう。「走れメロス」を一般の人がどのように思っているかを感じるため，2013 年の箱根駅伝のＣＭ（https://www.youtube.com/watch?v=fAWrvSyAnS4）を子どもたちと見ます。すると子どもたちは，次のような言葉を言うでしょう。

・苦しくても一生懸命走る話だろう
・待っている人がいるから走るのはかっこいい
・友のために走る話だ
など

ＣＭを通して，一般の人々が思っている「走れメロス」に抱いているイメージを子どもたちと確認し，実際に読んでみようとなげかけます。

子どもたちは実際に通読することで，次のような感想を言うでしょう。

・メロスは最後まで走りきって立派な人だ
・勝手にセリヌンティウスを人質にするなんてひどい
・なぜセリヌンティウスは素直に人質になったのだろう
・王様はなぜそんなに人を信じられなくなってしまったのだろう
・王様はそんなに簡単に仲間になれるのだろうか
・友情の物語というだけではないだろう
・メロスは言い訳ばかりしている。勇者ではない
・メロスは強いだけの人ではなさそうだ
など

ここで，授業者は子どもたちがメロスの人柄に関心をもったかを確認して，「メロスはどのような人物だろうか」と問いかけます。すると子どもたちから，王様の心を動かした勇者だという意見が出てくるでしょう。そこで，授業者は「勇者とはどのような人だろうか」と問いかけます。すると，子どもたちは次のような発言をするでしょう。

・困難を乗り越えていく人
・自分が言ったことをやり遂げる人
・多くの人を救う人
・どんなことにも自分の信念を貫く人
など

勇者という言葉に対するイメージを共有した上で，メロスが「勇者」になったということがどの場面からわかるだろうかと問いかけ，次時につなげます。

(2)　メロスが勇者になったのはいつだろう（３時間）

「勇者」になったのはいつかということを追求するために，まずメロスが勇者だと言えそうな部分を探します。すると子どもたちは，次のように考えるでしょう。

・いきなり王城に乗り込んだところではないか
・山賊を倒し，川を泳ぎきった場面ではないか
・「真の勇者，メロスよ」といっているから再び走り出したところではないか
・王との約束を守って帰ってきたところだろう
・王が「仲間の一人にしてほしい」と言って気持ちが変わった場面ではないか
・主語がメロスから「勇者」に変わったのは最後の一文だから，「勇者は，ひどく赤面した」というところではないか　など

いくつかの視点が出てきたところで子どもたちに，その根拠となる描写を見つけて，なぜそのように考えたのかを説明できるようにしようとなげかけます。

このとき，子どもたちは勇者を「困難を乗り越えていく人」といったイメージで捉えているため，前向きなメロスの姿や，王の心が変化した場面に注目して読み進めていくでしょう。

①再び走り出した場面

・一度は倒れたメロスがセリヌンティウスの信頼に報いるために再び走り出すところは勇者らしい姿だ
・「私は正義の士として死ぬことができるぞ」と言っているから，死ぬために走ろうとしている姿は勇者と言える
・口から血が噴き出ても走り続けるのは愛と誠の力を知らせるためだから，命懸けで走るところが勇者らしい

②王との約束を守って帰ってきた場面

・「殺されるのは，私だ」と叫びながらたどり着くのはドラマチックで，勇者と言えそう
・群衆が「あっぱれ。許せ」と口々に言ったと書いてあるから，群衆の気持ちさえも変えたメロスの姿は勇者だろう
・「最後の一片の残光も消えようとしたとき」に「疾風のごとく刑場に突入」したメロスは，約束を守ったのだから，勇者になったと言える

③王が「仲間の一人にしてほしい」と言って気持ちが変わった場面

・メロスが帰ってきただけでなく，それによって王の気持ちが変わったのはこの物語のクライマックスだから，メロスが勇者になったとするならここだろう
・初めは「蒼白で眉間のしわは刻まれたように深かった」王が，「顔を赤らめて」言っているから，変わった自分に照れているのかもしれない。そのように気持ちを動かしたメロスは勇者だ
・王の心が変わったことで「王様万歳」と群衆も盛り上がった。ひっそりしていた町が元に戻るきっかけにもなったのだから，メロスが勇者になったのはこの場面だろう

④「勇者は，ひどく赤面した」という場面

・それまでは自分で自分のことを「真の勇者」と言っているだけだが，この部分は語り手がメロスのことを「勇者」と言っている。他者から評価された場面はここだけだ
・「緋のマント」など「赤」という力強い色を使うことで，勇者を象徴しているのかもしれない
・緋のマントをもらうことで初めて自分が真っ裸であることに気づいた。それまでは裸であることにも気づいていない。だからここで初めて冷静になって自分を見つめた場面。赤面するというのは人間らしい感じがするが，勇者としてのハッピーエンドを表しているのではないか

など

このような考えをもった子どもたちはまずグループでそれぞれの考えを伝え合います。その際，なぜそのように思うのか，より根拠となりそうな表現はないのかと質問し合います。新たな視点で読みが深まる描写を探していくことで，それぞれの場面の「勇者」らしからぬ弱気な描写に気づき，疑問が生まれてくるでしょう。

そこでグループで話題になったことを全体で共有します。疑問が残ったこととして次のようなことが挙げられるでしょう。

・勇者というのは強い人のイメージだが，文中には一度はあきらめたメロスの姿が描かれている。それなのに勇者と言っているのはなぜか
・王との約束を守って帰ってきた場面では王様は仲間にしてほしいとは言っていない。殴り合った後に言っているのはなぜか
・勇者が赤面するのは勇者のイメージに合わない感じがする。なぜその場面で「勇者」という言葉を使ったのか

など

これらの疑問は「いつ勇者になったのか」ということを考えるだけでは答えが見いだせないため，メロスの人物像や「勇者」という言葉を子どもたちがどのように捉えるかということについて考える必要がでてくるでしょう。そこで授業者は，「勇者」のイメージに合わないと子どもたちが考える表現を確認します。すると子どもたちは，なぜイメージに合わない姿を描いたのかということについて疑問を抱きながら，再び本文を読み返していくでしょう。子どもたちが「勇者」という視点で考え始めたところで授業者は，それらの描写からわかる「勇者メロス」はどのような人間だろうかと問いかけ，子どもたちはさらに追求を進めていきます。

⑶ 「勇者」になったメロスの姿を伝え合おう

（２時間：本時はその２）

「勇者メロス」とはどのような人間かということについて，子どもたちは次のように個人追求していくでしょう。

・村に帰ったときも「この家にぐずぐずととどまっていたかった」と書いてある。メロスも命をかけるとは言ったが，そんなに簡単なことではないということが伝わる。メロスは単純な男だと書かれていたが，悩みながら決断をしていったのだろう
・「勇者」が困難を乗り越える人ということだけならば，濁流の前であきらめるような言葉を言う必要がない。メロスがとても人間らしい弱さをもっているということを表したいのかもしれない
・メロスが前向きな言葉を言っているときや，自分のことを「勇者」と言っているときには，語り手が「未練の情がある」や「若いメロスはつらかった」と本心を言っているようだ。言葉では強いことを言っていても，やはり心の中では葛藤があったのだということを表しているのだろう
・メロスも簡単にあきらめたのではない。自分が死ぬことが王の心を変える「正義」だと信じていたからこそ，「ここまでやってきた」と言えるのだろう。でも「悪徳者として生きる」など，葛藤している様子もわかる。メロスの人間らしさや弱さが出ている。これは「勇者」らしくない表現だが，そんな自分を乗り越えて再び走り出すことに意味があるだろう

など

このように，メロスが「勇者」として描かれている一方で，人間らしさを感じさせる描写が数多く描かれていることに子どもたちは注目していくでしょう。そこで授業者は「勇者らしくない弱さもつメロスが勇者になったのはどの場面か」と問い直します。すると子どもたちはメロスが王城に着いた後の殴り合う場面や，王とのやりとりに注目し，次のように考えていくでしょう。

・最後に緋のマントをもらい，赤面する場面は，勇者として走り抜いたメロスが普通の牧人に戻るように感じる。勇者でも一人の人間なのだということがよくわかる。そのことを強調する意味でも，やはり最後の場面で真の勇者になったと言えるのではないか
・王様が「信実とは，決して空虚な妄想ではなかった」と言っている。これはメロスたちの行動が「信実」ということだ。「信じてはならぬ」と言っていた王の心が大きく変わった。メロスたちの殴り合う姿が勇者らしかったということだろう。王様が「仲間に入れてほしい」と言ったところでメロスは勇者になったのだろう
・王との約束を守って帰ってきた場面では王様は仲間にしてほしいとは言わなかった。疑ったことも，あきらめかけたことも全て伝えた上で許し合う二人の姿が王にとっては一番感動的だったはず。「人間は私欲の塊」だと思っていた王様の気持ちを変えた場面が勇者と言える場面だろう

など

このように，子どもたちは今までの語り合いを通して細かい描写に目を向け，勇者に対するイメージを広げていくでしょう。

(4) 「勇者メロス」について考える（１時間）

題材の最後に，今までの語り合いを通して，「勇者メロス」をどのように捉えるか，自分なりの考えをまとめます。困難を乗り越えることが勇者であると考えていた子どもが，仲間との語り合いを通して一つ一つの描写から，次のように考えるのではないでしょうか。

・メロスは一人の牧人にすぎなかった。しかし，人を信じられない王に出会い，その心を結果的に変えることができたのはまさに勇者だと思う。ただ，その強い気持ちだけでなく，困難を前に立ち止まり，悩み，苦しむ姿から，メロスの人間性が見えた気がした。でもメロスは逃げることなく立ち向かったのだから，やはり勇者なのだと思った
・王が人を信じられないという気持ちの裏には，たくさんの裏切りがあったのだろうと思う。メロスは信じる気持ちが空虚な妄想ではないということを伝えた。それは，弱い自分をさらけ出すことも含めて，互いを受け入れる心の強さなのだと思う。それができたメロスもセリヌンティウスも勇者なのだろう
・セリヌンティウスは何も言わずにメロスの要求を受け入れた。そもそも人質になることを簡単に承諾できるはずがない。だから二人には強い絆があったのだと思う。でもそれだけでなく，最後まで互いを信じ合うことができたことが，王の気持ちを動かしたのだろう。三日間で疑うこともあったと素直に伝え，それを受け入れるために殴り合う場面がクライマックスだろう。勇者とは，自分の弱さを認め，相手の弱い心さえも受け入れられる人なのかもしれない

など

「勇者」という視点で自分の考えを伝え合ったり，仲間の多様な考えをつなげていったりすることで，自分の読みが深まっていくことを子どもたちが実感することを願い，授業を閉じます。